

IBM Information On Demand 2006



ITシステムの先進的な戦略としてインフォメーション・オンデマンド(以下、IOD)に対する関心が世界的に高まる中で、IBM Information On Demand 2006が2006年10月15日から20日までの6日間にわたってアナハイム・コンベンション・センター(米国)にて開催され、多数の参加者にぎわいました。

「コントロールを取り戻せ」

IBM Information On Demand 2006は、経営幹部および経営者、技術者、データベース管理者、開発者などを対象にした、企業の情報資産を活用する先進ソリューションをご紹介するイベントです。今回のテーマは「Take Back Control(コントロールを取り戻せ) 情報から、市場から、リスクから、収益から、そしてあなたの未来から」というもの。特に「情報」の部分がクローズアップされ、「氾濫するデータからコントロールを取り戻せ」というのが中心メッセージでした。

6日間の会期中に開催されたセッションは、ビジネス・リーダーシップ・トラックが2.5日間で180セッション、テクニカルトラックが4.5日間で650セッション、合計800にも上る圧倒的な数で、会期中の来場者も5,000人以上を

数える大規模なコンファレンスとなりました。

オープニングセッションで新製品を紹介

オープニングセッションでは、IBM コーポレーション(以下、IBM)のインフォメーション・マネジメント事業部ゼネラル・マネージャーを務めるAmbuj Goyalが、出荷開始予定となっている新製品のInformation Serverを発表しました。

Information Serverは、企業が戦略的なビジネス資産として情報を活用するために必要な機能を統合して提供する、新しいソフトウェアプラットフォーム製品です。XML(Extensible Markup Language)にネイティブ対応した業界初のハイブリッドデータベース製品である「DB2[®] 9」を中核として、高い信頼性とパフォーマンスにより、再利用可能な状態で情報統合を実現。また、SOA(Service Oriented Architecture: サービス指向アーキテクチャー)を実現するために、アプリケーションやビジネスプロセスにデータを提供します。

Information Serverは、従来のアプリケーションサーバー製品とデータベースサーバー製品を組み合わせた構成に代わる次世代の製品であり、業界の新しいトレンドになるとの力強い言葉でオープニングセッションが締めくくられました。

先進のソリューションや事例が盛りだくさん

一方、個別トラックでは、DB2 9の注目の新機能であるpureXML[™]機能を活用したソリューションの紹介や、大規模データウェアハウスをDB2 9にアップグレードし、強化されたオートノミック機能とデータ圧縮の活用でTCO(Total Cost of Ownership: 総保有コスト)を削減したお客様の事例、DB2のスケールアウトによる性能向上と可用性を強化するxkotoソリューションのハンズオン、そしてInformation Serverの適用分野および導入と構成を紹介するセッションなどが開催され、盛り上がりを見せていました。

また、IBMの開発部門や研究所のメンバーと将来の開発の方向性や疑問について1対1で話すことができるDeveloper Denブースも用意されました。さらに、イベント期間中にIBM技術認定試験も実施され、621人の新しい技術認定者が誕生しました。

今回のIBM Information On Demand 2007は、2007年10月14日～19日にラスベガス(米国)で開催される予定です(2007年1月末現在)。

